





開会式であいさつする澤田委員長



会場風景

間、口頭発表は早稲田大学 14 号館、ポスター発表は早稲田大学国際会議場を中心に開催された。

#### ◇ 開会式

8月7日(火)午前8時30分から9時30分まで、早稲田大学 14 号館において松本和子組織委員会副委員長の司会で行われた。

開会宣言 澤田嗣郎 組織委員会委員長  
 挨拶 David Moore IUPAC 分析化学部門代表  
 挨拶 吉川弘之 日本学術会議会長  
 挨拶 高木 誠 日本分析化学会会長  
 会場紹介 松本和子 組織委員会副委員長

#### ◇ 基調講演

Andreas Manz 教授 (英国)「Miniaturization and Chip Technology What can we expect?」  
 寺部茂教授 (日本)「Capillary Electrophoretic Techniques toward the Metabolome Analysis」  
 高木誠教授 (日本)「“Threading” Intercalation to Double-Stranded DNA and the Application to DNA Sensing」  
 Gary M. Hieftje 教授 (米国)「Evolution and Revolution in Instrumentation for Plasma-Source Mass Spectrometry」  
 Yuen-Ron Shen 教授 (米国)「Exploring New Opportunities with Sum-Frequency Nonlinear Optical Spectroscopy」

#### ◇ シンポジウムリスト (シンポジウムオーガナイザー代表者名)

- 21 世紀における原子スペクトル分析法の新しい方向性 [古田直紀 (中央大学)]
- 固体試料分析のための新たな分光分析・計測法の展開 [我妻和明 (東北大学)]
- 応用レーザー分光 [今坂藤太郎 (九州大学)]
- ナノ空間科学のフェムトケミストリー [澤田嗣郎 (東京大学)]
- 超軟 X 線から超硬 X 線分析における新展開 [脇田久伸 (福岡大学)]
- 新しい分離化学 [寺部 茂 (姫路工業大学)]
- 分離場としての新素材 [田中信男 (京都工芸繊維大学)]
- 分離化学と計算化学 [神野清勝 (豊橋技術大学)]
- 液液界面ナノ領域の化学 [渡會 仁 (大阪大学)]

- 化学・生物センシングの新展開 [梅澤喜夫 (東京大学)]
- パイオおよびパイオミメティック相互作用に基づく電気化学センシング法の新しい展開 [菅原正雄 (日本大学)]
- 電気分析化学における新領域、新概念、新方法論 [木原壯林 (京都工芸繊維大学)]
- プロテオミックスとマスペクトロメトリー [平野 久 (横浜市立大学)]
- 電子分光法, SPM などを用いた極表面, 微小領域表面の化学状態分析 [飯島善時 (日本電子)]
- フローインジェクションおよび流れを利用する最新の化学分析 [本水昌二 (岡山大学)]
- チップ上でのマイクロ・ナノスケール分析 [馬場嘉信 (徳島大学)]
- 分析化学におけるケモメトリックス [藤枝修子 (お茶の水女子大学)]
- 21 世紀における分析信頼性の確立 [高田芳矩 (総理府)]
- 生物科学のための画像化技術の最新の展開 [鎌田 仁 (山形テクノポリス財団)]
- パイオサイエンスのための蛍光プローブと検出システム [松本和子 (早稲田大学)]
- ダイオキシン分析のための新しい機器分析 [今坂藤太郎 (九州大学)]
- 新世代化学者のための分析化学カリキュラム [小熊幸一 (千葉大学)]
- ポルフィリンの分析化学 [田端正明 (佐賀大学)]
- ケモアフィニティー担体 [中村 洋 (東京理科大学)]
- 粒子ビームを用いた核プローブの新時代: 生命・材料・環境科学の発展を目指して [薬袋佳孝 (武蔵大学)]
- 先端振動分光 [尾崎幸洋 (関西学院大学)]

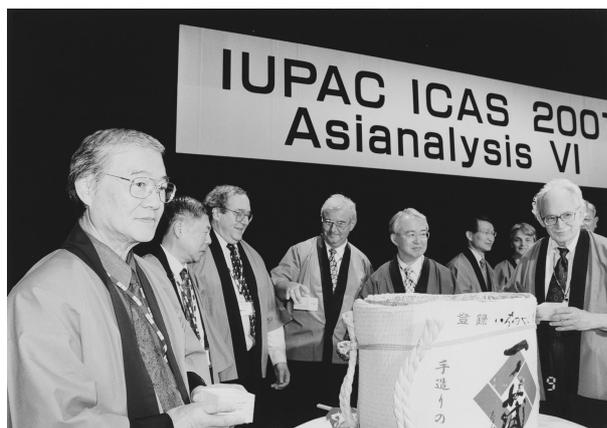
#### ◇ 一般講演

17 の分野(分光分析, 分離分析, 電気化学, 有機質量分析, 表面分析, センサー, フローインジェクション分析, 局所分析, データ処理, 認証および分析値保証, 生化学分析, 環境分析, 物質科学応用, 分析科学教育, 新試薬および新反応, 新装置開発, その他)に分けて行われた。

#### ◇ 各行事

##### 1) ウェルカムパーティー

8月6日午後5時から8時まで大隈ガーデンハウス 2階食堂



バンケットでの鏡割りと乾杯



着物着付け教室の集合写真

で行われ、約 300 名の参加があった。

## 2) バンケット

ASIANALYSIS VI と合同のバンケットを、8月9日午後7時から9時まで椿山荘「オリオンの間」において会費制(2001年4月30日以前の申込:10,000円、それ以降および当日:12,000円)で行った。約400名が一堂に会し、千葉光一氏(名古屋大学)の司会により宴は進められた。出席者は、東村山市祭囃子保存会による和太鼓祭囃子演奏および東京大学工学部職員有志による餅つきが迎える中、会場に入場した。澤田組織委員会委員長、保母ASIANALYSIS VI組織委員会委員長、Niessner国際諮問委員、岩村日本化学会会長、奥島早稲田大学総長、瀬田旭化成特別顧問の挨拶に引き続き、ICAS 2001国際諮問委員とASIANALYSIS VI国際諮問委員による鏡割り、Kuwana国際諮問委員(米国)の乾杯の後、晚餐会となった。食事をはさみ、柘植次期会長からMyasoedov教授(ロシア)と黒田六郎名誉教授(千葉大、ご息子が代理出席)への名誉会員の推戴式およびスピーチが行われた。歓談中は、希望者による餅つきやゆかた姿の女子学生アルバイトによって餅饅頭が配られた。宴の終わりには、早稲田大学応援部による学会50周年へのエールが披露され、中村事務局長の閉会の辞で和やかに散会した。

## 3) 同伴者プログラム

8月8日午前10時から正午まで中村綾先生の指導のもと着物着付けが行われ3名の参加者があった。様々な着物を試した後、戸外での記念撮影など初めての振袖姿を楽しんでいた。8月9日午前10時から正午までは竹内美恵子先生の指導のもと押し花教室を開催し、7名の参加があった。いずれも見事な作品が完成し、参加者は満足の様子であった。

### ◇ 展示会

8月7日から10日まで早稲田大学国際会議場3階ポスター会場に併設し展示会を行った。22の分析機器メーカー・商社、二つの薬品会社、二つの出版社、および英国化学会、米国化学会、日本分析機器工業会、日本分析化学会が参加した。

### ◇ 国際諮問委員会

ICAS 2001国際諮問委員会は、8月7日午後7時より大隈庭園内の完之荘で行われた。出席者は、Bard(アメリカ、以

下敬称略)、Hearn(オーストラリア)、Kim(韓国)、Mermert(フランス)、Moore(アメリカ、IUPAC分析化学部会長)、Myasoedov(ロシア)、Niessner(ドイツ)、Tóth(ハンガリー)、Wang(中国)、合志、赤岩(委員長)の11委員とICAS組織委員会から澤田、中村、梅澤、松本であった。

司会の赤岩委員長から、本委員会では日本分析化学会創立50周年を記念して開催されたICAS 2001に対する各委員の提言が欲しいこと、そしてICASの今後の方針について議論するのが目的であるとの説明の後、澤田組織委員長のICAS 2001の意図するところについての発言で会が始まった。各委員から順番にコメントがあったが、会の成功を祝う言葉とともに、「シンポジウムの数が多すぎて、聴きたい講演が重複する場合がある」、「シンポジウムのテーマを絞っては?」、「ICASとして一本筋を通すことが望ましい」といった提言があった。また、ASIANALYSISとの関係をはっきりさせるべきであろうとのコメントもあった。またICASの今後については、この進歩の激しい時代に10年に1度では間があきすぎるという意見で一致し、5年に1度の開催を目指すことになった。

### ◇ 登録関係

#### 登録料

含まれるもの: プログラムおよびアブストラクト集、コンgresパック、プロシーディングスCD-ROM、ウエルカムパーティー参加費、ランチチケット、コーヒーブレイク時の飲料

	2001年4月30日まで	(5月1日以降)
会員(含む協賛学会)	40,000円	(48,000円)
国内非会員	50,000円	(58,000円)
外国居住者	40,000円	(48,000円)
学生	15,000円	(20,000円)

### 事前配布資料およびホームページ開設

1999年9月	1st circular 配布
2000年9月	2nd circular 配布
2000年10月	ホームページ開設
2001年7月	Final circular を電子メールにて配信およびホームページにて掲示

当日配布資料

コンgresバック, プログラムおよびアブストラクト, 吊り下げ式名札, ランチチケット, ポールペン, レポート用紙, 東京観光案内, うちわ(日立製作所寄付), 会場周辺図

会議後送付資料

2002年3月会議プロシーディングスCD-ROM 1枚 (Analytical Sciences, Vol. 17 Supplement として発行)

会議参加者国別内訳

国名	
Australia	2
Austria	3
Belarus	1
Belgium	1
Canada	2
China	20
Czech Republic	6
Denmark	1
Egypt	2
Finland	2
France	7
Germany	14
Ghana	1
Hungary	4
India	3
Indonesia	1
Iran	7
Israel	2
Italy	1
Japan	755
Korea	14
Mexico	1
Norway	1
Philippines	3
Poland	3
Portugal	3
Russia	12
Saudi Arabia	2
Singapore	8
South Africa	1
Switzerland	3
Taiwan	11
Thailand	5
The Netherlands	4
Turkey	5
UK	14
USA	51
Ukraine	1
Vietnam	3
合計 39 国	980

◇講演件数

	申込件数	キャンセル	講演件数
基調講演	5	0	5
招待講演	263	4	259
一般口頭発表	280	23	257
ポスター発表	420	42	378
全講演数	968	69	899

7 各分会・委員会報告

◇組織委員会・実行委員会

熊丸 1999 年度学会会長と澤田組織委員長との間で「IUPAC ICAS 2001 開催に関する合意書」(1999 年 6 月 18 日付)を取り交わし, 組織委員会は本会議を独立採算事業として実施することを運営の大原則とした。合意書の内容は, 会議期間・場所・予算案に関しての承認と本会議は ICAS'91 から信託された国際交流事業基金(29,000 千円)から 20,000 千円を使用することとし, それ以上の補償は学会は一切しないこと, 学会事務局に事務作業の負担を生じさせないこと, 学会事務局に経費の負担があった場合それを支払うこと, などであった。その基本概念のもと, 財務は徹底的な経費削減を行い, 実質的な活動は各委員のボランティアに期待し, 最も重要な学術面においては全国的視野で多くの学会員の意見を取り入れたシステムとすることを運営の基本方針とした。

予算案として, 当時の経済情勢から企業・団体からの寄付金や補助金の獲得は困難であるとの見通しから, ICAS'91 の費用総額 129,004 千円を 4 割削減した総額 79,980 千円の予算案を作成した。ただし, すべて一律に削減するのではなく, 削減可能なところは委員の努力・工夫などで徹底的に切り詰める一方で, 学術関連や社会貢献にかかる費用(招待講演・若手研究者の参加支援)は前回の規模を維持するといったメリハリのあつた予算案とした。また, 会議参加者が当日快適に過ごせるようなサービスも怠らないようにした。収入に関しては, 補助金獲得のための各種財団への申請, 50 周年記念事業募金における活動強化, 関係企業への募金の勧誘, 日本分析機器工業会を通じての展示の勧誘などを行った。

運営面では, 中村副委員長が事務局長の任に当たり事務全般を総括し, 梅澤副委員長が学術関係業務の総括, 松本副委員長が会場関係業務の総括を担当することとした。組織委員長および副委員長からの指示が, 事務局から各分会・募金委員会に正確・迅速に行われるように指示系統を一元化・フラット化した。会議の交通費の削減や諸問題への迅速な対応などを考慮して, 各分会の分会長・副分会長は関東支部の会員を中心に構成した。運営面では非常に効率的ではあったが, 一部の委員には様々な役割が集中してしまう結果となり, ご苦労をおかけした。学術プログラムに関しては, 梅澤副委員長はじめ多くの委員からの提案により, 21 世紀を見据えた研究テーマを選びシンポジウムを主体とした構成とすることになった。シンポジウムテーマに関しては, 日本のみならず国際諮問委員などを通じて公募し, 多くの学会員が学術プログラムを直接運営できる体制を整備した。果たして, 26 のシンポジウムが成立し, 参加表明したオーガナイザーには本会議に大きく貢献していただいた。

実行委員会では中村事務局長を議長として月に一度の頻度で合計 21 回開催した。各分会・募金委員会・事務局の活動を報告することにより情報を共有化し, 様々な審議事項を協議し, 会議準備を順調に進行させることができた。準備状況の会員への周知には, 理事会へは理事会担当委員および学会事務局長が担当し, 各支部には組織委員会の各支部の担当委員に議事録を配信することにより行った。しかしながら, 一部の会員から準備状況などがわかりにくいなどのご指摘をいただいた。情報配信の困難さを感じた一面であった。

両委員会では, 基調講演者, 招待講演者の選定や東欧・アジアの研究者, 若手研究者の渡航費補助の決定作業を行った。基

調講演者の選定は、プログラム部会を中心に候補者リストを作成し、実行委員会で候補者への参加要請などの調整作業を行い、最終的には組織委員会で承認することとした。なお、地域のバランスから北米2名、ヨーロッパ1名、日本2名というガイドラインを設けた。

招待講演者の選定は、非常に広範囲な分析科学の分野において一つの委員会で選定することは困難であることから、各シンポジウムにおいて招待講演者を推薦いただき、実行委員会で承認することとした。また、東欧・アジアからの招待講演者を積極的に選定していただくよう渡航費補助についての特別支援も行った。

若手研究者の渡航費補助については、2nd circular とホームページに募集要項を掲示し、申請者の履歴書、研究業績、論文リスト、推薦書、講演アブストラクトを提出していただいた。組織委員長・副委員長で審査を行い、65名の申請者の中から37名の研究者に補助金5万円および登録費免除という補助を行うことができた（実際には50名に補助する旨伝えたが、他の予算が獲得できず、参加を断念された方がおられた）。

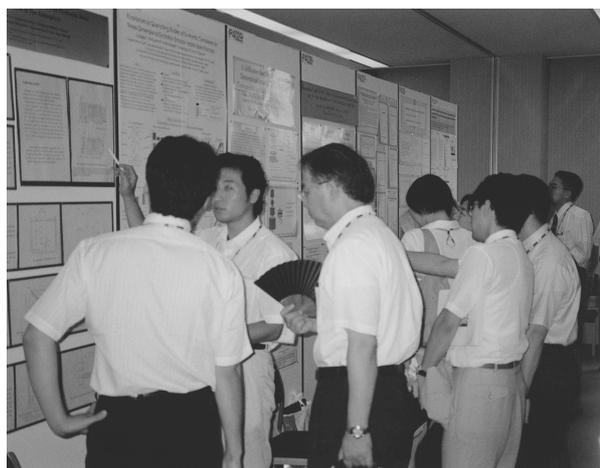
ASIANALYSIS VI との関係については苦慮するところが多かった。様々な面で協力体制を組み、運営するよう努力したが、会議の位置づけや運営なども含めてもう少し整理・議論が必要だったと考える。ASIANALYSIS VI ではアジア地区の参加者が考慮され、ICAS 2001 とは異なる登録費となった。一方で、日本人参加者は、ASIANALYSIS VI にのみ参加する学生を例外としてすべて ICAS 2001 に登録していただくことを原則とした。同一条件での待遇ができなかったことが ASIANALYSIS VI 参加者の不満をよんだようである。なお、要旨集も余分に用意して配布するとともに、ASIANALYSIS VI の参加者も ICAS 2001 の聴講を可能とした。また、会計的には ASIANALYSIS VI 実行委員会からの要望にも配慮し、ICAS 2001 の収入見込み金額の5%相当分を ASIANALYSIS VI に配分した。

以上、多くの会員のご支援を受けて開催した結果、講演件数など学術的価値を高めながら、総支出費用66,018千円で本会議を実施することができた。発生した収支の差額については、組織委員会・実行委員会で議論し、高木2001年度会長・柘植2002年度会長のご意見も伺った結果、ICAS'91同様国際会議の準備金の基金として今後大いに利用していくこととなった。会員が主催する国際会議開催を促進し支援できるような本基金の利用システムを構築していただくよう学会理事会にお願いしている。様々な困難・問題点を克服し本会議が成功したのは、各部会部会長をはじめとする各委員やシンポジウムオーガナイザーの献身的なご尽力によるところが大きく、組織委員会として、深く感謝するものである。

#### ◇ プログラム部会

プログラム部会は、基調講演者選定用資料作成、シンポジウム選定、プログラム編成などの作業を行った。また、会議当日にはポスター講演に対して五つの賞の選定を実施した。

基調講演者選定.....組織委員会委員、国外諮問委員会委員、国内諮問委員会委員、プログラム部会委員に基調講演候補者を推薦していただき、その候補者からプログラム部会で投票を行い、候補者を数名に絞る作業を行った。実行委員会では、その候補者の中から、北米2名、ヨーロッパ1名、日本2名というガイドラインに従い、各候補者に参加要請を行い、組織委員会で先述の5名を決定した。



ポスター会場風景

シンポジウム.....本会議は、21世紀を見据えた観点のシンポジウムを主体とするという基本方針に従い、シンポジウム案件を「ぶんせき」誌(1999年9月号)を通じて公募した。その結果40のシンポジウムの提案があり、同じ類似案件を整理・統合し、26のシンポジウムを開催することとした。決定したシンポジウムの提案者(シンポジウムオーガナイザー)は、予算に対応した招待講演の人選・交渉、シンポジウムプログラム作成、論文の編集担当などを行い各シンポジウムを直接運営し、成功に導いていただいた。本会議までに、プログラム・シンポジウムオーガナイザー会議を3回(2000年9月27日、2001年3月17日、2001年6月2日)開催した。実行委員会の方針をご理解いただき、また本企画に対して様々な事務作業やプログラムについてのご提案をいただいた。学術面での本会議の成功は、シンポジウムオーガナイザーの貢献によるところが大きかったと感謝いたします。

プログラム編成.....講演の募集を2nd circular、ホームページ、「ぶんせき」誌(2000年10月号)で行い、2001年4月下旬まで電子メールでの申し込みを受け付けた。最終的には280件の口頭発表希望、420件のポスター発表希望の申込があり(その他、基調講演5件、招待講演263件)、シンポジウム関係はシンポジウムオーガナイザーが、一般講演はプログラム部会においてプログラム編成を行った。その結果、12の口頭発表会場、1日に付き100件を掲載可能なポスターボードを設置することとした。

ポスター賞.....ポスター講演の中から研究内容が優れたポスター(20件)の選定作業を行った。参加者の投票およびプログラム部会委員の投票に基づいた審査の結果、本会英文誌“Analytical Sciences賞”(16件)、Royal Society of Chemistryの論文誌“Journal of Analytical Atomic Spectroscopy賞”(1件)、“Journal of Environmental Monitoring賞”(1件)、“The Analyst賞”(1件)、“Lab on a Chip賞”(1件)を決定し、受賞者に賞を贈呈した。受賞者を以下に示す。なお、各賞の副賞は、当該雑誌1年間の無料購読である。

反省点:シンポジウムや会場数が多すぎ、また近い分野の発表が平行して進行していたりすることが参加者の不満として挙げられた。また、ポスター発表と口頭発表の時間帯が同じであることも問題点として挙げられた。時間や場所による物理的な制約や当初予定していたシンポジウム内の口頭発表数が予想以上に増加したことなどあり、プログラム編成の難しさを痛感し

た。

ポスター賞一覧  
 “Analytical Sciences 賞” (講演番号順)

論文名	発表者	所属
A Portable Spectrometer Using a White-Color Light Emitting Diode and a Charge-Coupled Device	Yasutada Suzuki, Masaaki Iwatsuki	山梨大学
Environmental Responsive Chromatography	Eri Ayano, Hideko Kanazawa, Akihiko Kikuchi, Teruo Okano	共立薬科大学, 東京女子医科大学
Pre-Column Enrichment in Microcolumn LC and its Application	Leewah Lim, Tomoo Miwa, Toyohide Takeuchi	岐阜大学
Sediment Metal Speciation for the Ecological Risk Assessment	Young-Tack Kwon, Chan-Won Lee	Kyungnam Univ.
Redox Behavior of Vitamin E at the Water 1,2-Dichloroethane Solution Interface	Khaleda Banu, Megumi Kasuno, Nobuyuki Ichieda, Akihiro Uehara, Yumi Yoshida, Sorin Kihara	京都工芸繊維大学
A New Separation Method for Water-Miscible Organic Compounds via Inclusion by Thiacalix [4] Arene and Salt-Out of the Complexes	Nobuhiko Iki, Takehiro Suzuki, Katsuyoshi Koyama, Chizuko Kabuto, Sotaro Miyano	東北大学
X-ray Absorption Spectral Studies on Anion-selectivity of the Ruthenium (II) Polypyridine Complex - Impregnated Polymer Ultrathin Film	Shuji Matsuo, Sunao Yamada, Taku Matsuo, Hisanobu Wakita	福岡大学, 九州大学
Derivatization of Aryl Halides with a Newly Developed Fluorescent Arylboronic Acid	Sumika Sugihara, Naotaka Kuroda, Mitsuhiro Wada, Kenichiro Nakashima	長崎大学
Development of Two-Step Concentration System for Capillary Electrophoresis Following the Homogeneous Liquid-Liquid Extraction Method and Sweeping Method	Yoshitaka Takagi, Shukuro Igarashi	茨城大学
Acoustic Radiation-A Novel Principle for Microparticle Separation	Takashi Masudo, Tetsuo Okada	東京工業大学
Design and Application of Novel Fluorescent Indicators of Intracellular Mg <sup>2+</sup>	Yoshio Suzuki, Naohiko Saito, Hirokazu Komatsu, Daniel Citterio, Yoshihiro Kitamura, Kotaro Oka, Koji Suzuki	KAST, 慶応大学
A New Fluorescent Reagent for High throughput Screening of Protein Interaction	Yoshiki Katayama, Hiromu Amano, Yuya Ouchi, Mizuo Maeda	九州大学, PRESTO

Discrepancy of Analytical Values of Steroid Hormones in Marine Gastropods between GC/MS and ELISA	Ming Lu, Toshihiro Horiguchi, Hiroaki Shiraishi, Yasuyuki Shibata, Mitsuru Abo, Akira Okubo, Sunao Yamazaki	東京大学
---	---	------

A Pyrene-Functionalized Guanosine Receptor for Fluorescence Sensing of Nucleoside Derivatives	Shuko Okazaki, Seiichi Nishizawa, Miyuki Higuchi, Norio Teramae	東北大学
---	---	------

Development of a Sensor Based on Quartz Crystal Microbalance (QCM) for Detection of Organic Compound Vapors	Vadood Hassanzadeh, Abdolreza Mirmohseni	Tarbiat Moallem Univ.
---	--	-----------------------

Steric Control of Selectivity in Metal Ion-Selective Membrane Electrode Based on Polypyrazolyimethanes	Shinichi Yoshimoto, Hiroshi Mukai, Yoshiki Sohrin	京都大学, 京都教育大学
--	---	--------------

“Journal of Analytical Atomic Spectroscopy 賞”

論文名	講演者	所属
Determination of Trace Elements in Sediment by Isotope Dilution Inductively Coupled Plasma Mass Spectrometry Using Co-Precipitate Separation Technique	Kazumi Inagaki, Akiko Takatsu, Atsuko Nakama, Akira Uchiumi, Kensaku Okamoto	産業技術総合研究所

“Journal of Environmental Monitoring 賞”

論文名	講演者	所属
On-site Analysis of Trace Inorganic Components in Environmental Water after Preconcentration with Membrane Filter Collection and by Tristimulus Colorimetry and Spectrophotometry	Issei Kasahara, Hisami Kawashima, Takuma Ohshiro, Noriko Hata, Shigeru Taguchi	富山大学

“The Analyst 賞”

論文名	講演者	所属
NMR Microimaging of Cooked Rice Grains	Akemi K. Horigane, Hidechika Toyoshima, Hikaru Hemmi, Tadahiro Nagata, Mitsuru Yoshida, Aira Okubo	食品総合研究所, 東京大学

“Lab on a Chip 賞”

論文名	講演者	所属
Fabrication of DNA Microarray by Ink Jet Device	Tomohiro Suzuki, Tadashi Okamoto, Nobuko Yamamoto	キヤノン

◇ 出版部会

出版部会は、会議終了後に発行するプロシーディングスの企画、論文受付、論文審査、編集、出版発行を担当した。

準備委員会においてプロシーディングスは ICAS'91 と同様に *Analytical Sciences* の Supplement として刊行することが決



論文受付風景

められた。出版部長には同誌の編集委員長（全くの偶然であるが、澤田組織委員長が兼任）が就任し、同編集委員会との間との有機的な連携が可能な体制とした。基本的には、出版までのすべての業務を出版部会が責任をもって実施し、*Analytical Sciences* の編集委員会・学会編集課とは実務面では独立した運営を行った。

400以上の論文提出が予想されることを考慮し、発行形式として、ハードコピー版、CD-ROM版、それらの併用案が検討された。その結果、CD-ROM版が製作コスト・郵送コストでもっとも有利であり（ハードコピー版の8分の1のコスト）、現在の電子出版の普及を考えると利用者の利便も損なわれないと判断し、CD-ROM版のみの発刊をすることとなった。原稿は、同誌の形式に従ったMS Wordファイルを提出していただき、それをPDF化することにより発刊することとした。論文作成用にMS Wordファイル形式でのテンプレートを作成し、2001年4月下旬にICAS 2001ホームページからダウンロードできるようにした。

会議開催中（8月7～10日）に登録受付の横で受付デスクを設置し論文受付を行った。受付時にハードコピー正1部・副2部・論文を保存した保存媒体・Copyright transfer agreementを提出していただいた。論文形式はホームページ上に掲載していたにもかかわらず、それに従った原稿が少なく、後日修正した論文を再提出させるなどの処置をせざるを得なかった。

申し込み件数は、口頭発表217件（国内150件、海外67件）、ポスター発表247件（国内202件、海外45件）の合計464件であった。それぞれの原稿に、担当編集委員および審査員を決め、9月上旬より審査に当たった。特に9月13から14日にかけては、出版部会委員10名が集結し、査読および審査会を開催した。また、シンポジウム講演については、シンポジウムオーガナイザーに担当編集委員となつていただいた。それら一次審査の結果に基づき、著者に原稿の修正を要請し、最終的に462件の論文が受理された。

受理された論文について、*Analytical Sciences* 誌の出版形式に合致するように電子ファイル原稿の修正の依頼をし、出版部会および事務局でも修正作業を行った。これらの作業が予想外に手間取り、印刷会社に手渡すための電子ファイル原稿の提出は2002年1月末となってしまった。印刷所でのWordファイルからPDFファイルへの変換作業の後、3回の校正・リンクの確認作業を経て3月中旬に“*Analytical Sciences*, Vol. 17 Supplement CD-ROM”版として刊行され、参加者全員と*Analyti-*

*cal Sciences* の定期購読者へ発送された。

プロシーディングスは、澤田組織委員長による緒言、各委員会・部会名簿、目次、著者索引、論文本体から成り、総ページ数は1744ページとなった。構成としては、26のシンポジウム（シンポジウム番号順）、一般口頭発表（講演番号順）、ポスター発表（講演番号順）となっている。目次や著者索引から各論文にリンクがはられ、各論文を閲覧印刷できる。また、*Analytical Sciences* のホームページからもそれらは閲覧可能である。なお、本CD-ROMは有料で配布しているの、希望者は学会事務局に連絡していただきたい。

IUPAC主催の条件として、本会議発表の中から数件の論文を*Pure and Applied Chemistry* 誌に掲載することがあった。そのため梅澤副委員長および出版部会で協議し、5名の基調講演の論文およびE. S. Yeung氏、澤田嗣郎氏の論文の合計7編を提出した。それらの論文は、同雑誌の2001年73巻10号1555～1623ページに掲載された。なお、IUPAC機関誌*Chemistry International*, Vol. 24, No. 2, 2002 ([http://www.iupac.org/symposia/reports/2001/060801\\_tokyo.html](http://www.iupac.org/symposia/reports/2001/060801_tokyo.html))において、本会議のIUPAC側の公式報告がIUPAC分析化学部門代表David Mooreによりなされている。

#### ◇会場部会

早稲田大学理工学部教職員から構成された小委員会をコアとして、会場予約、会場配置、会場運営、機器類・ポスターボードの手配、業務マニュアルの作成、各種案内看板、コーヒープレイクでの飲物の手配、当日アルバイト手配、ビデオ・写真撮影、早稲田大学関係部門との交渉などを担当した。

9回にも及ぶ事前の準備会議を経て、会議前日は、広く複雑な早稲田大学構内を参加者が迷わないようするための案内看板の設置、会場設営、アルバイト学生への説明会、特に口頭発表会場では液晶プロジェクターの使用者がいることから接続トラブルを防止するための訓練などが行われた。

会議当日は、受付デスク、12の講演会場、1箇所のポスター会場、4箇所のコーヒープレイクスペース、クロークなどに人員を配置した。口頭発表はすべて14号館で行ったが、最新鋭の機器を備えた会場でOHPでの発表や液晶プロジェクターでの発表などあったが、大きな問題もなく運営することができた。ただ、直前のプログラム変更などが、事務局とプログラム部会、会場部会、座長の間で連絡ミスがあり一部混乱があった。ポスター発表は国際会議場3階で行われ、企業・団体による展示も併設された。口頭発表とポスター発表の時間帯がほぼ同じであり、参加者が分断されていたことが不満として挙げられた。

会議の規模から、集合写真は困難なことから会場内でスナップ写真を撮影することとし、それを受付付近の掲示ボードに貼り出し、希望者に無料で配布することにした。非常に好評であり、写真によっては貼り出し直後になくなるなどの現象もみられた。会議後半には、早稲田大学内部の問題による一部の門の閉鎖などあり、主催者も参加者も困惑したが、大きなトラブルもなく会議を継続することができ、無事終了した。

様々な難題に対して、迅速に誠意をもって対応していただいた早稲田大学教務課関係者、理工学部教職員および早稲田大学国際会議場職員の方々に心から感謝の意を表します。また、朝の7時半から午後9時まで、総勢93名の学生アルバイトの方が活躍していただき、感謝いたします。最後に、会場内の飲物を提供していただいたサントリー、キリンビール、明治乳業お

よびカルピス株式会社に感謝いたします。

#### ◇ 広報部会

本会議の広報活動を担当した。学会会員には会誌「ぶんせき」での案内、年会・討論会の場での案内、会費請求書にピラを同封するなどして、会議案内・講演募集などの広報活動を行った。外国に向けては、*Analytical Sciences* での1ページ広告(1回、有料)、*Chemical Records* での1ページ広告(2回、無料)、米国化学会の論文誌 *Analytical Chemistry* に1ページ広告(4回、無料)と会議内容の記事の掲載およびWEBページでの相互リンクを、*The Analyst* には1ページ広告(1回、無料)およびWEBページでの相互リンクを行った。保田和雄氏(日立製作所)の仲介により2001年3月には、米国のニューオリンズで開催されたPITTCON 2001でブースを無償で提供していただいた。1名の委員を派遣し、ポスター掲示や2nd circular・名称入りボールペンの配布などによる広報活動を行った。また、組織委員会委員やシンポジウムオーガナイザーには、国際会議に参加する場合、サーキュラーやピラを配布するようお願いした。

講演内容のダイジェスト版である「ICAS 2001 展望とトピックス」と題した広報活動用資料を作成し、会議直前の7月31日に、報道機関の記者に対して本資料をもとに説明を行った。

経費削減の中で、多くの方々のご努力でコストパフォーマンスのよい広報活動を展開することができた。特に海外の学会(米国化学会、英国化学会)からの無償での広告を掲載やポスター賞の提案などの支援をいただいた。厚く感謝いたします。

追記: 本会議のポスター(2000年8月製作)が、タイポディ

レクターズクラブ主催のTDC展で入選の栄に輝いたことを記す。

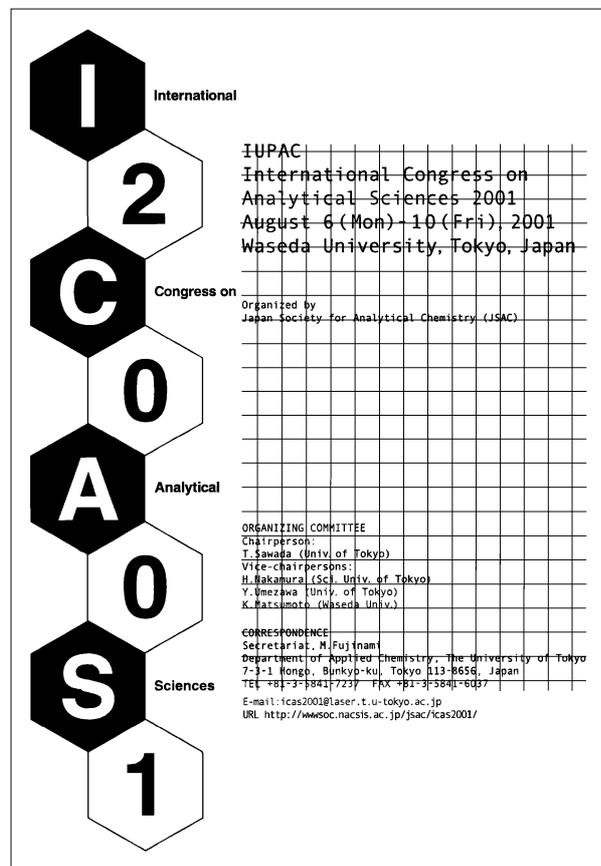
#### ◇ 展示部会

展示部会の役割は、展示出展の企画および運営である。鈴木先生(慶應大学)、板橋先生(群馬大学)、上原先生(宇都宮大学)、岡部先生(科学技術振興事業団)のほか、日本分析機器工業会との綿密な連携が必要であるとの観点からそのメンバーである谷口氏、久本氏、村山氏、及び佐々木氏(事務局長)に参加していただき、ICAS会場での展示についての話し合いを2000年3月10日に行った。会議翌月には分析機器展があることから、展示ブースについては180cm程度の長さの机を用意し、そこに各出展企業に任せた展示を実施するのが最適であるとの意見が大勢であり、当初は最大で30ブースを設けることで企画した。2000年9月19日に会場部会の平井先生、石原先生、事務局の藤浪などを含まれた話し合い、2000年11月1日には会場下見を行い、実際の展示場所を早稲田大学の国際会議場3階のポスター会場およびそのフロアに40ブース分設けることで具体策を作った。2000年11月には日本分析機器工業会に窓口になっていただき、日本分析機器工業会会員を中心に展示出展案内を送付し、募集を開始した。当日までの申し込み小間の件数は予想をはるかに超えて42件あり、その収入は予定を超えた額となった。この点について、参加された各企業・団体に感謝を申し上げたい。申し込みされた各社には、2001年7月初旬に出展スケジュール等の詳しい案内を送付し、8月6日の午後に展示物を搬入していただいた。8月7日~10日のポスターのコアタイムを中心に、朝から夕方すべての時間帯に展示をお願いし、その内容は各社それぞれの工夫により簡単な機器、またはパネルを出すという内容であった。会場がポスター会場のすぐ近くであったため、各企業共にポスターを訪れる研究者が展示も同様に見ていくことになり、この企画は成功であったと言える。なお、この企画にご協力をいただいた日本分析機器工業会の委員および会員の皆様には、重ね重ね感謝する次第である。

#### ◇ 行事部会

行事部会は、各種ソーシャルプログラムの企画・運営を担当し、2001年5月より本格的な活動に入った。

パンケットについては、着席式で400名を想定し、会場から徒歩で移動可能な場所ということで椿山荘5階の「オリオンの間」を会場として決定した。会議場での発表終了時刻とパンケット会場までの移動時間を考慮し、午後7時開始、午後9時終了とした。会場までの移動手段として、椿山荘内の庭園散策をかねた徒歩ルートと気候・天候を考慮したバスルートが設定された。企画としては、海外からの参加者に日本にしかないようなものをなるべく紹介し、また参加していただけるものをも考えた。入場時間約15分を利用しての餅つき(東京大学工学部職員)・和太鼓祭囃子演奏(東村山市祭囃子保存会)、壇上にての鏡割り、歓談中には希望者による餅つき、東京大学と東京理科大学の女子学生によるゆかた姿での餅配り、早稲田大学応援部のエールなどが企画された。予定外ではあったがちょっと長めの開会スピーチなども経験していただいた。また、国際諮問委員および招待講演者として来日されたこともあり、Myasoedov教授(ロシア)と黒田六郎名誉教授への名誉会員推戴式が企画された。短い時間での盛りだくさんの企画での盛りだくさんの企画であったが、出席者、司会進行の千葉先生



ICAS 2001 のポスター



Myasoedov 教授への名誉会員戴冠式

(名古屋大学) および演者の方々のご協力に恵まれ、楽しい宴を開催することができた。なお、酒造メーカー(勇心、一ノ蔵、富久錦)から酒樽3樽、島津製作所からは一合枡を寄贈いただきました。ここに厚く感謝いたします。

ウエルカムパーティーは、8月6日大隈ガーデンハウスにおいて会議受付を兼ねて午後5時から8時まで立食パーティー形式で行うこととし、300名余の出席者があった。

今回、同伴者が10名程度という登録情報から、同伴者プログラムとしては、会議場内で楽しめる着物着付け教室と押し花教室を企画した。また、東京の道路事情および季節を考え、公式のエクスカージョンプログラムは行わず、希望者には日本旅行がデスクで対応することとした。

以上、特に海外からの参加者にとっては日本文化の一面に触れていただけたものと自負するが、企画に配慮不足もあったとのご意見もあった。全般的には大きなトラブルもなく会を終えることができたのも皆様のご協力によるものと感謝する次第である。

#### ◇ 財務部会

事務局と協力して実行予算案を作成し、収入および支出の管理、最終的な収支決算を作成することが役割である。以下に本会議の収支計算書を示す。

収入に関しては、各委員の積極的な募金活動、展示部会の貢献、科研費をはじめとする補助金の獲得により、目標額を上回る86,961,131円を得ることができた。支出に関しては、会議の運営方式の工夫による会議費の削減、大学等の使用による会場借費用の縮小、競争入札による業者委託コストの削減、インターネット・電子メールなどの利用による通信費の削減、プロシーディングスのCD-ROM出版による印刷費・郵送費の削減などのコスト削減効果が中心となり66,018,232円の支出合計となった。収支の差額については、国際交流事業基金として学会にお預けする予定である。

実行委員会において、数回にわたって実行予算案を修正しつつの作業であったが、組織委員会委員、各部会委員、シンポジウムオーガナイザー、事務局が経費節減に努め、また収入への貢献および会員からの献金により無事予算の枠内で決算をすることが可能となった。委員各位の多大なご尽力に感謝する次第である。

### 2001 国際分析科学会議収支決算書 (1997年8月8日～2002年4月30日)

収入の部 (単位: 円)

会議登録料	30,404,000
文科省科研費	10,980,000
財団等補助金	2,300,000
寄付金	5,000,000
広告収入	223,150
展示収入	3,320,550
創立50周年記念事業募金	12,000,000
ICAS'91 国際交流事業基金	20,000,000
パンケット登録料	2,696,000
雑収入	37,431
合 計	86,961,131

支出の部 (単位: 円)

会議準備費	13,377,152
人件費	1,478,140
旅 費	1,413,460
庁 費	7,285,132
ASIANALYSIS VI	3,200,420
会議運営費	39,318,571
人件費	4,217,320
旅 費	15,110,000
庁 費	19,991,251
事後処理経費	13,322,509
人件費	3,307,849
旅 費	239,270
庁 費	9,775,390
国際交流事業基金	20,942,899
合 計	86,961,131

#### ◇ 募金委員会

二瓶募金委員長は、「募金とはその献金を使う組織・人間が汗を流して集めるものである」という大原則を示し、瀬田重敏氏(旭化成)を副委員長、伊吹忠之氏(旭化成)を幹事委員、組織委員会委員全員が募金委員として募金委員会を構成した。本会議が学会50周年記念事業の最大の事業であることから、50周年記念事業全体に対しての特別会費としての募金を会員各位にお願いすることとした。そこで、新たに日本分析化学会創立50周年記念事業募金委員会を同一構成委員で組織し、1,200万円を目標額として、1999年12月に維持会員、特別会員にご協力をお願いした。また、2000年5月からは個人会員にもご協力をお願いした。その結果、2001年12月までに目標額を大きく上回る19,851,000円(維持会員82社9,816,000円、特別会員69社2,790,000円、個人会員453名7,245,000円)の浄財をいただいた。献金いただいた会員各位および募金活動に貢献された募金委員会委員に重ねて感謝申し上げます。なお、本献金については、先に示された大原則に従い、当初の目標額である1,200万円を本会議で使用させていただき、残額をその他の50周年記念事業に使用させていただくこととした。なお、本募金事業の全体の収支決算および活動報告については、本誌2001年5月号275ページの高木 誠2001年度会長による「創立50周年記念事業募金収支報告とお礼」を参照ください。

また、東京医薬品工業協会と大阪医薬品協会からは、本会議開催のための寄付をいただき、感謝申し上げます。

#### ◇ 事務局

中村事務局長のもと、種々の事務作業（各種申請、ピザ申請、委員会等の会議準備など）、会計処理、参加者との対応、サーキュラーの作成・発送、上記部会の支援、ホームページ作成、電子メールでの講演受付、委託業者との折衝、当日の招待講演者・若手海外講演者の渡航費補助金の交付などを担当した。登録作業、ホテル手配、バンケット手配については日本旅行国際旅行事業部に業務委託し、相互に連絡を取り合い運営した。

近年では情報発信源としてホームページおよびインターネットの利用が重要であることから、2000年10月からホームページの公開を行った。日本旅行のWEBページとリンクをすることにより会議参加登録、ホテル予約がインターネットで可能なシステムとした。また、講演申し込みについても電子メールによる受付に一本化した。これらは、通信にかかる費用および時間の大幅な短縮にも貢献することができた。このように1000

件規模の発表申込および参加者登録を、少数の大学関係者および業者のタイアップにより対応することが可能である。本会の年会や討論会に関しても、早期に電子化受付の体制に移行することが会員サービス機関として学会事務局の責務であると感じる。

会議事務を担う事務局として、各部会およびシンポジウムオーガナイザーに様々なお願いをしたり、指示が不徹底であったりするなど、大変なご迷惑をおかけしたことと反省している。また、参加者各位にも、講演受付やプロシーディングス原稿受付などで一部混乱があった。事務局メンバーにとって不慣れな業務であったということで、ご容赦いただければ幸いです。

#### 8 謝 辞

本国際会議を開催するにあたり、多大なご協力をいただいた下記の方々ならびに団体に対し深甚の謝意を表します。

早稲田大学、日本旅行、日本分析機器工業会、PITTCON  
広報関係各位、寄付団体・企業。

〔文責：IUPAC ICAS 2001 事務局 藤浪真紀〕

## 2001国際分析科学会議委員名簿

### 組織委員会

委員長：澤田嗣郎（東京大学）

副委員長：中村 洋（東京理科大学）、梅澤喜夫（東京大学）、松本和子（早稲田大学）

石原浩二（早稲田大学）、板橋英之（群馬大学）、伊吹忠之（旭化成）、今坂藤太郎（九州大学）、井村久則（茨城大学）、大久保 明（東京大学）、小熊幸一（千葉大学）、小野昭紘（日本分析化学会）、尾張真則（東京大学）、喜多村 昇（北海道大学）、木原壯林（京都工芸繊維大学）、瀬田重敏（旭化成）、鈴木孝治（慶応義塾大学）、竹内 隆（日本分析機器工業会）、角田欣一（群馬大学）、中井 泉（東京理科大学）、中原武利（大阪府立大学）、二瓶好正（東京理科大学）、野村俊明（信州大学）、藤浪真紀（東京大学）、藤原祺多夫（東京薬科大学）、服部重彦（島津製作所）、平井昭司（武蔵工業大学）、廣川 健（広島大学）、保母敏行（東京都立大学）、宮村一夫（東京理科大学）、山下勝治（日立製作所）、山崎慎一（県南衛生工業ハザカプラント研究所）、山崎素直（長崎大学）

### 国際諮問委員会

H. Akaiwa (Japan, Chair), A. J. Bard (U.S.A.), Y. Gohshi (Japan), M. Grasserbauer (Austria), M. T. W. Hearn (Australia), F. Ingman (Sweden), T. Kuwana (U.S.A.), J. M. Mermet (France), B. F. Myasoedov (Russia), R. Niessner (Germany), M. K. Park (Korea), M. W. Sigrist (Switzerland), K. Tóth (Hungary), A. Townshend (U.K.), E. K. Wang (China), J. D. Winefordner (U.S.A.)

### 国内諮問委員会

石谷 炯（東レリサーチセンター）、伊豆津公佑（信州大学名誉教授）、小川禎一郎（九州大学名誉教授）、久保田正明（工業技術院）、熊丸尚宏（安田女子短期大学）、小泉英明（日立製作所）、鈴木信男（石巻専修大学）、高木 誠（九州大学）、田中元治（名古屋大学名誉教授）、柘植 新（名古屋大学）、辻 章夫（昭和大学名誉教授）、寺部 茂（姫路工業大学）、戸田昭三（東京応化工業）、富永 健（東京大学名誉教授）、中川照真（京都大学）、南原利夫（星薬科大学）、不破敬一郎（日本分析センター）、水池 敦（東京理科大学）、森田昌敏（国立環境研究所）、四ツ柳隆夫（宮城工業高等専門学校）、渡辺寛人（北海道大学名誉教授）

### 実行委員会

議長：中村 洋（東京理科大学）

石原浩二（早稲田大学）、板橋英之（群馬大学）、伊吹忠之（旭化成）、井村久則（茨城大学）、梅澤喜夫（東京大学）、大久保明（東京大学）、小熊幸一（千葉大学）、小野昭紘（日本分析化学会）、尾張真則（東京大学）、澤田嗣郎（東京大学）、瀬田重敏（旭化成）、鈴木孝治（慶応義塾大学）、角田欣一（群馬大学）、中井 泉（東京理科大学）、二瓶好正（東京理科大学）、藤浪真紀（東京大学）、平井昭司（武蔵工業大学）、保母敏行（東京都立大学）、松本和子（早稲田大学）、宮村一夫（東京理科大学）、山崎素直（長崎大学）

### 募金委員会

委員長：二瓶好正（東京理科大学）

副委員長：瀬田重敏（旭化成）

幹事：伊吹忠之（旭化成）

石原浩二（早稲田大学）、板橋英之（群馬大学）、今坂藤太郎（九州大学）、井村久則（茨城大学）、梅澤喜夫（東京大学）、大久保明（東京大学）、小熊幸一（千葉大学）、小野昭紘（日本分析化学会）、尾張真則（東京大学）、喜多村 昇（北海道大学）、木原壯林（京都工芸繊維大学）、澤田嗣郎（東京大学）、鈴木孝治（慶応義塾大学）、竹内 隆（日本分析機器工業会）、角田欣一（群馬大学）、中井 泉（東京理科大学）、中原武利（大阪府立大学）、中村 洋（東京理科大学）、野村俊明（信州大学）、藤浪真紀（東京大学）、藤原祺多夫（東京理科大学）、服部重彦（島津製作所）、平井昭司（武蔵工業大学）、廣川 健（広島大学）、保母敏行（東京都立大学）、松本和子（早稲田大学）、宮村一夫（東京理科大学）、山下勝治（日立製作所）、山崎慎一（県南衛生工業ハザカプラント研究所）、山崎素直（長崎大学）

### プログラム部会

部会長：山崎素直（長崎大学）

副部会長：角田欣一（群馬大学）

板橋英之（群馬大学）、内山一美（東京都立大学）、大久保 明（東京大学）、岡田哲男（東京工業大学）、岡本研作（物質工学工業技術研究所）、小熊幸一（千葉大学）、上館民夫（北海道大学）、楠 文代（東京薬科大学）、小島勇夫（物質工学工業技術研究所）、小林憲正（横浜国立大学）、黒沢 賢（NTT アドバンステクノロジー）、小泉英明（日立製作所）、神野清勝（豊橋技術科学大学）、菅原正雄（日本大学）、杉谷嘉則（神奈川大学）、渋谷雅美（日本大学）、鈴木孝治（慶応義塾大学）、田尾博明（資源環境技術総合研究所）、高木 誠（九州大学）、谷口 功（熊本大学）、谷口一雄（大阪電気通信大学）、柘植 新（名古屋大学）、寺部 茂（姫路工業大学）、寺前紀夫（東北大学）、中井 泉（東京理科大学）、原口紘晃（名古屋大学）、馬場嘉信（徳島大学）、藤枝修子（お茶の水女子大学）、古田直紀（中央大学）、前田昌子（昭和大学）、宮村一夫（東京理科大学）、本水昌二（岡山大学）、森田昌敏（国立環境研究所）、四ツ柳隆夫（宮城工業高等専門学校）、渡會 仁（大阪大学）

#### 出版部会

部会長：澤田嗣郎（東京大学）

副部会長：大久保 明（東京大学）

内山一美（東京都立大学），大谷 肇（名古屋大学），岡田哲男（東京工業大学），小竹玉緒（群馬大学），加納健司（京都大学），小林憲正（横浜国立大学），渋川雅美（日本大学），菅原正雄（日本大学），鈴木孝治（慶応義塾大学），角田欣一（群馬大学），二村典行（北里大学），藤浪真紀（東京大学），宮村一夫（東京理科大学）

#### 財務部会

部会長：保母敏行（東京都立大学）

副部会長：井村久則（茨城大学）

内山一美（東京都立大学）

#### 会場部会

部会長：平井昭司（武蔵工業大学）

副部会長：石原浩二（早稲田大学）

五十嵐 庸（早稲田大学），石山 高（東京理科大学），今泉幸子（日本女子大学），上原伸夫（宇都宮大学），岡田住子（武蔵工業大学），押尾浩志（早稲田大学），勝田正一（千葉大学），加藤治香（早稲田大学），金澤秀子（共立薬科大学），楠 文代（東京薬科大学），篠原厚子（順天堂大学），菅原一晴（群馬大学），西本右子（神奈川大学），早川泰弘（東京文化財研究所），松尾亜弓（早稲田大学），松尾優治（早稲田大学），松田知香（早稲田大学），榎本和義（高エネルギー加速器研究機構），薬袋佳孝（武蔵大学），吉永淳（東京大学），吉村吉博（星薬科大学）

#### 展示部会

部会長：鈴木孝治（慶応義塾大学）

副部会長：板橋英之（群馬大学）

上原伸夫（宇都宮大学），岡部浩昭（科学技術振興事業団），佐々木菊夫（日本分析機器工業会），谷口義晴（日本分析機器工業会），久本泰秀（日本分析機器工業会），村山 健（日本分析機器工業会）

#### 行事部会

部会長：尾張真則（東京大学）

副部会長：宮村一夫（東京理科大学）

五十嵐 庸（早稲田大学）

#### 広報部会

部会長：小熊幸一（千葉大学）

副部会長：中井 泉（東京理科大学）

荒井健介（東京薬科大学），上原伸夫（宇都宮大学），大石昌弘（TDK），桜井健次（金属材料技術研究所），早川泰弘（東京文化財研究所）

#### 事務局

事務局長：中村 洋（東京理科大学）

事務局幹事：藤浪真紀（東京大学）

棚橋ひとみ

補助金団体名一覧

平成 12 年度，平成 13 年度文部科学省科学研究費補助金研究成果公開促進費「研究成果公开发表（C）」  
早稲田大学国際会議等開催助成  
東京応化科学技術振興財団第 23 回「国際交流助成事業」

寄付団体名一覧

旭化成(株)	トーアエイヨー(株)	小野薬品工業(株)
アベンティス(株)ファーマ(株)	富山化学工業(株)	興和新薬(株)
アムジェン(株)	鳥居薬品(株)	沢井製薬(株)
栄研化学(株)	日研化学(株)	参天製薬(株)
エーザイ(株)	日本化薬(株)	(株)三和化学研究所
エスエス(株)	日本ケミファ(株)	シェリング・プラウ(株)
エルメッド(株)エーザイ(株)	日本製薬(株)	塩野義製薬(株)
大塚製薬(株)	日本たばこ産業(株)	新日本製薬(株)
化研生薬(株)	日本ロシエ(株)	住友製薬(株)
科研製薬(株)	日本ワイスレダリー(株)	大日本製薬(株)
カネボウ(株)	ノバルティス ファーマ(株)	武田薬品工業(株)
キッセイ薬品工業(株)	萬有製薬(株)	田辺製薬(株)
杏林製薬(株)	ファイザー製薬(株)	東和薬品(株)
協和発酵工業(株)	ブリストル製薬(株)	日本新薬(株)
キリンビール(株)	北陸製薬(株)	日本シェーリング(株)
グラクソ・スミスクライン(株)	三笠製薬(株)	日本臓器製薬(株)
呉羽化学工業(株)	三菱東京製薬(株)	日本ベーリンガーインゲルハイム(株)
グレラン製薬(株)	(株)ミノファージェン製薬	パイエル薬品(株)
佐藤製薬(株)	明治製薬(株)	菱山製薬(株)
三共(株)	明治乳業(株)	藤沢薬品工業(株)
第一製薬(株)	持田製薬(株)	扶桑薬品工業(株)
大正製薬(株)	森永乳業(株)	丸石製薬(株)
大鵬薬品工業(株)	山之内製薬(株)	マルホ(株)
中外製薬(株)	雪印乳業(株)	メルク・ホエイ(株)
(株)ツムラ	わかもと製薬(株)	ロート製薬(株)
テイカ製薬(株)	(株)アズウェル	
帝国臓器製薬(株)	アストラゼネカ(株)	
帝人(株)	ウェルファイド(株)	
テルモ(株)	(株)大塚製薬工場	

なお，50 周年記念事業募金で協力いただいた会員に関しては，「創立 50 周年記念事業募金収支報告とお礼」（本誌 2001 年 5 月号 275 ページ）を参照ください。